

# ジョン・ラスキンと湖水地方

——“Domestic Comfort”を求めて

升井裕子

はじめに

イングランド北西端の州カンブリア (Cumbria) 湖水地方に位置するコニストン湖 (Conistون Water) 東側の湖畔から続くなだらかな斜面を少し登ったところに、クリーム色の外壁が特徴的な邸宅がある。この邸宅を中心とする一帯はブラントウッド (Brantwood) と呼ばれ、ヴィクトリア朝を代表する美術批評家 John Ruskin (1819–1900) が住んでいた邸宅として知られている。現在の邸宅の原型となるコテージは、1797年に Thomas Woodville によって建設された。1823年から1827年までの3年間、Samuel Harrington の所有となったが、Anne Copley of Doncaster に売却された後、1830年、その娘へと受け継がれる。1845年に Anne Copley が亡くなった後、Copley Trustee の管理の下、邸宅は Josiah Hudson、そして1852年に共和党の政治家であった William James Linton (1812–1897) へと貸し出された。その翌年、リントンはブラントウッドを購入し、実際の所有者となっている。ラスキンがブラントウッドを購入するまでの約74年間、ブラントウッドは様々な人の手に渡り、そこで様々な人生が展開された。例えば、リントンの時代、ブラントウッドは単なる住まいとしてだけではなく、リントンの編集雑誌 *The Republic* の印刷所として、また、Harriet Martineau (1802–1876)、Henry Holiday (1839–1927)、Edward Moxon (1801–1858) をはじめとする詩人、作家、芸術家といった人々が集う場所として機能していた (Dearden 23–25)。1871年、リントンからブラントウッドを

購入したラスキンは、1872年にロンドンからブラントウッドへと居を移し、1900年に亡くなるまでの18年間、ブラントウッドを住まいとした。本稿では、まず、ロンドンに生まれ育ったラスキンが、湖水地方へと魅せられた所以について、湖水地方への家族旅行やワーズワスからの影響を踏まえて論じる。そして、ラスキンの“home”に関する言及を中心に、ブラントウッドという場所がいかにラスキンの“home”となったのかについて考察したい。

## 1. 湖水地方の自然を詠む

ラスキン一家は、シェリー酒の輸入及び販売を行う父親 John James Ruskin (1785–1864) の出張旅行に付き添う形で、幾度となく旅に出かけている。その旅先のひとつが湖水地方であり、ラスキンが初めて湖水地方を訪れたのは1824年のことであった。ラスキンと母親 Margaret (1781–1871) は、ジェームスが仕事で留守の間、ブラントウッドの対岸のコニストン村にあるウォーターヘッド・イン (The Waterhead Inn) に滞在し、母と共に父の帰りを待つことがあった。ラスキン一家にとって、コニストン村は“the place of emotional rendezvous” (Hilton 492) であったと考えられる。父の帰りを待ち侘びる少年ラスキンの心情を察するに、コニストンの地は、様々な喜びや期待が埋めく場所であったに違いない。湖水地方は、家族と過ごした幸福な時間の溢れる場所としてラスキンの記憶に刻まれたであろうことは安易に想像できる。

ラスキンと湖水地方との関係は、子ども時代の家族旅行に始まった。ラスキンは、自身の最初の記憶について次のように述べている。

The first thing which I remember as an event in life, was being taken by my nurse to the brow of Friar's Crag on Derwent water; the intense joy, mingled with awe, that I had in looking through the hollows in the mossy roots, over the crag, into the dark lake, has associated itself more or less with all twining roots of trees ever since. (5.365)<sup>1</sup>

このような経験が湖水地方へと魅せられる一因となったと結論付けてしまうのは安易だが、湖水地方の自然風景がラスキンに与えた印象は非常に強いものだった。

ラスキンが湖水地方へと魅せられた所以について考察する際に、ラスキンの眼差しを湖水地方というローカルな場所へと向けさせたと考えられる人物、William Wordsworth (1770–1850) からの影響について明らかにする必要がある。自伝『プラエテリタ』(*Praeterita*, 1885–1889) のなかで “[I] used Wordsworth as a daily text-book from youth to age, and have lived, moreover, in all essential points according to the tenor of his teaching” (34.349) と回想しているように、ラスキンは毎日のようにワーズワスの作品に接していた。

Wordsworth may be trusted as a guide in everything, he feels nothing but what we all ought to feel — what every mind in pure moral health must feel, he says nothing but what we all ought to believe — what all strong intellects must believe. (4.392)

ここでラスキンは、ワーズワスに対する恩義にも似た感情について明確に語っている。「ワーズワスの教えが意味するところに従い生きてきた」と断言できるほど、ラスキンはワーズワスに対して全幅の信頼を寄せていたと考えられる。<sup>2</sup>

ラスキンはワーズワスから何を感じ取り、何を学んだのであろうか。そしてそれらは、どのようにしてラスキンを湖水地方へと導いたのであろうか。<sup>3</sup> ワーズワスからの影響はその詩作に依るところが大きいと考えられるが、同時に『湖水地方ガイド』(*A Guide through the District of the Lakes*, 1835) からの影響も見受けられる (Hewison 16)。Wheeler (108) の言葉を借りるなら “a key text in his [Ruskin’s] reception of Wordsworth” である『湖水地方ガイド』を通じて、ラスキンは、“how to see” (Hewison 16)、つまり「物の見方」を学んだのである。『湖水地方ガイド』が一般的な旅行書

と一線を画していた点は、読者（旅行者）に対し、自然を知覚する方法を紹介したことにあった。ワーズワスが読者（旅行者）に期待したことは“to observe and feel, chiefly from Nature herself” (Wordsworth 102) であった。読者（旅行者）が、自然そのものを感じ、観察することを強調したのである。

To observe, he [Wordsworth] must abandon conventional attitudes and look at the object itself, without trying to adapt it into some ideal composition. The traveller must rid himself of artificial ways of seeing, just as the poet must rid himself of artificial ways of speaking. (Hewison 16)

このワーズワスの教えは、確かにラスキンのなかに根付いていた。それは、ラスキンの著作を見れば明らかであるが、ラスキンは何度も“observe”という言葉を用いながら、読者に「見ること」の重要性を訴えている。“[The] greatest thing a human soul ever does in this world is to *see* something, and tell what it saw in a plain way. . . . To see clearly is poetry, prophecy, and religion, — all in one.” (5.333) この引用から、自然だけではなくあらゆるものを真摯な眼差しで観察し批評し続けたラスキンにとって、「見る」という行為が非常に重要な意味を持っていたことがわかる。

ラスキンのワーズワス的な眼差しは、ラスキンの詩作にも表れている。ラスキンの詩の大部分は、オックスフォード大学に入学するよりも前に詠まれたものである。それらの詩は、主にラスキン自身が体験した湖水地方の自然との関わりのなかで詠まれたものが多く、ラスキンの自然を観察する眼差しがワーズワス的であることが確認できる。『湖水地方ガイド』に加え、ラスキンに「見る」という行為を教えたのは *The Excursion* であったと Bate (67) は指摘する。1826年、湖水地方を再訪した際にラスキンは、“On Skiddaw and Derwent Water” というタイトルの詩を詠んだ。<sup>4</sup> この詩は、初めてスキドウを訪れた9歳の少年（ラスキン自身）の興奮から始まる。

Skiddaw! upon thy cliffs the sun shines bright;

Yet only for a moment: then gives place  
 Unto a playful cloud, which on thy brow  
 Sports wantonly, soon melting into air;  
 But shadowing first thy side of broken green,  
 And making more intense the sun's return. (2.265)

詩の前半部分では、雲と空に対する気持ちを詠い、スキドウ山が“majestic, a giant-nature's work” (2.265) であると賛美する。山はラスキンにとって“great cathedrals of the earth” (4.359) であり、自然の美しさを力強く感じることでできる場所であった。1839年、ラスキンは、オックスフォード大学より詩作におけるニューディギット賞 (The Newdigate Prize for Poetry) を授与された。その受賞詩は、ワーズワスの“Nature Spirit”を呼び起こすものであり、自然美に対する“natural sensitivity” (Hewison 17) を用い、詳細に観察された山の風景が描き出されている。

話を“On Skiddaw and Derwent Water”に戻そう。詩は、後半に進むにつれ、ダーウエント湖の描写へと移る。

Now Derwent Water come! — a looking-glass  
 Wherein reflected are the mountain's heights,  
 As in a mirror, framed in rocks and woods;  
 So upon thee there is a seeming mount,  
 A seeming tree, a seeming rivulet.  
 All upon thee are painted by a hand  
 Which not a critic can well criticise. (2.266)

Hewison (35) は、上の詩に描写されるダーウエント湖は、湖の風景を絵面化するクロード・グラスの役割を果たしていると解釈している。凸面の鏡で表面が淡いセピア色に施されているため、クロード・グラスに写された風景は絵画的に見える。<sup>5</sup> ダーウエント湖の湖面を、山、岩、森、木々、小川などの様々な自然を映す鏡として描き、湖面というひとつの面に、自然界のあらゆる物体が一堂に映し出される様は、それら全てが相互に関係し

ているというラスキンの“holistic”な自然観を暗示していると解釈できる。

このようにラスキンは、ワーズワス的ものの見方で湖水地方の自然を観察しながら、子ども時代は詩作に耽っていたのである。1844年に友人 Liddell に宛てた手紙のなかで、ラスキンは自分の子供時代について振り返りながら、“pure”、“wild”、“solitary”という単語を用いて自然風景を形容し、昔はそのような自然風景に没頭したものだとは回想している(3.669)。自然風景のなかに精神を注ぎ込んだと解釈してもよいだろう。ラスキンの最初の記憶が、フライアーズ・クラッグの山の風景であったように、最後の記憶があるとするならば、ブラントウッドに没したラスキンの最後の記憶として刻まれた風景のひとつは、ブラントウッドの寝室の窓から見えるオールド・マン (Old Man of Coniston) の雄大な姿であったと言えないだろうか。“mountains are the beginning and the ends of all natural scenery”(6.418)と語るラスキンは、無意識のうちに自分の人生を自然風景に擬えながら、湖水地方の山の記憶に始まった人生の終わりを湖水地方で迎えることを望んでいたように思われてならない。

## 2. 精神の癒しと回復の場所

湖水地方が、ラスキンの子ども時代の純粹無垢な喜びに溢れる思い出の場所であったことに疑いはない。しかし同時に、湖水地方が、精神の癒しと回復の場所として認識されるようになった点に注目する必要がある。ラスキンは生涯を通じ、その病弱な体質に苦しんだ。特に1871年の病は、ラスキンの身体のみならず精神にまでも及び、その生涯のなかで最もラスキンを苦しめた病であったといわれている。その年、マトロック (Matlock) で療養中のラスキンは、友人 Henry Acland に対し “I feel I should get better if only I could lie down in Coniston Water” (Severn 47) と述べたらしい。これは、単なる “a delirious fancy” (Hilton 494) ではない。ラスキンは、その精神病 (mental trouble) が酷くなるにつれ、子どもの頃の記憶に固執するようになった (Cate 38)。コニストン湖に横たわることで、その病から回

復できると信じ、子どもの頃の幸福な記憶に満ちたコニストンの地へと想いを馳せ、そこに救いを求めたと考えてよいだろう。

ここで思い出されるのが、ワーズワスの「ティンターン修道院上流数マイルの地で——1798年13日、ワイ河畔再訪に際し創作」(“Lines Composed A Few Miles Above Tintern Abbey, On revisiting The Banks of The Wye During A Tour, July 13, 1798”)である。ワーズワスは、ワイ川の風景を心に想い描くことで「肉体と精神(またはモラル意識)の健康が回復される」(吉野4)という体験をする。詩人は、過去に体験した風景を思い起こすことで、その当時の精神状態に戻ることができたわけである。「過去は単なる過去ではなく、現在と未来を支える力」(山内6)として、ワーズワスのなかで作用していたと考えられる。さらに、『序曲』(*The Excursion*, 1814)のなかでワーズワスは「子ども時代の“原体験”に“活性化する力”が潜むこと」を認識しており、「“原体験”を癒しと救いと自己回復の鍵」として位置づけた(山内20)。先に、ラスキンの最初の記憶が湖水地方の風景であったと述べたように、まさに湖水地方はラスキンにとっての「原体験」の場であった。ラスキンは、ワーズワスが体験したような肉体と精神の回復を求め、病の淵にあったマトロックにおいてコニストン湖を想見したのである。

何の運命か、“I feel I should get better if only I could lie down in Coniston Water”とアクランドに述べた直後に、ラスキンはリントンからブラントウッド購入の話を持ちかけられたのであった。湖水地方は、導かれるべくして導かれたラスキンの宿命の場所であったと言えるかもしれない。晩年、ラスキンは従妹の Joan Severn に対し、“If I die at Herne Hill I wish to rest with my parents in Shirley Churchyard, but if at Brantwood, then I would prefer to rest at Coniston” (Cook 534) と述べたと言う。両親と共に眠ることよりもコニストンに眠ることを希望したラスキンの湖水地方への愛着がどれほどのものであったかは想像に易い。

ラスキンは、ブラントウッドがどのような状態にあるのかを確認しない

ままに購入を決意した。実際のところ、ブラントウッドの購入前にラスキンは、三度ほどコニストン村を訪れているが、それらの訪問は全て子ども時代のことであった。次の引用は、1833年、ラスキンが詠んだ“Song”という詩である。

I weary for the woodland brook  
That wanders through the vale;  
I wary for the heights that look  
Adown upon the dale.  
The crags are lone on Coniston,  
And Loweswaters dell;  
And dreary on the mighty one,  
The cloud-enwreathed Scawfell. (2.3)

オールド・マンの姿をコニストン湖越しに詠んでいることから、ブラントウッドの正確な場所を知らずとも、ラスキンは、ブラントウッドから見える景色を想像することができたと考えられる。また、『建築の詩学』(*The Poetry of Architecture*, 1837–38)には、コニストン・ホール(Conitson Hall)の1837年のスケッチが残されている。このスケッチは、コニストン湖畔に建つコニストン・ホールを描き、その背景にオールド・マンを描いていることから、おそらく、コニストン・ホールとブラントウッドを結んだ線上の湖のある地点から描かれたであろうことが推測できる。<sup>6</sup> ちょうど、ブラントウッドからコニストン・ホールを望んだ場合と同じ角度で描かれていることから、ラスキンがブラントウッド周辺の景色に精通していたであろうことがわかる。

1871年にブラントウッドを購入した後、ラスキンが最初にそこを訪れたのは同年9月のことであった。ラスキンの手紙には、その時の喜びが鮮明に記録されている。従妹のジョアンに対しては“The view from the house is finer than I expected, the house itself dilapidated and rather dismal.”(37.35)と述べ、友人C. E. Nortonには“I think on the whole the finest view I know



in Cumberland or Lancashire, with the sunset visible over the same. The house — small, old, damp . . .” (37.35) と送っている。さらに、Thomas Carlyle に宛て、次のように報告している。

It is a bit of steep hillside, facing west . . . The slope is half copse, half moor and rock — a pretty field beneath, less steep — a white two-storied cottage, and a bank of turf in front of that — Naboth’s vineyard — my neighbour’s field, to the water’s edge . . . (37.39)

いずれの手紙も、ラスキンがブラントウッドの住宅そのものには興味を示さず、寧ろ、ブラントウッドから見える景色に関心があったことがわかる。ブラントウッドという特定の土地に対する愛着がラスキンをそこへと駆り立てたというよりも、ブラントウッド周辺の自然環境への愛着がラスキンをそうさせたと考えてよいだろう。

### 3. “Domestic Comforts” を求めて

ブラントウッドは、如何にしてラスキンの “home” と成り得たのであろうか。ヒルトンは、“Although he liked domestic comforts Ruskin was not fussy about the places in which he lived” (495) と断言する。確かに、三度の引っ越しを重ね、様々な場所へと頻繁に旅したラスキンは、特定の場所に住まうということに拘りがなかったと推察できるが、ラスキンが好んだという “domestic comforts” は、ブラントウッドでどのように展開されたのであろうか。Sarap (90) が “It is usually assumed that a sense of place or belonging gives a person stability” と指摘するように、ブラントウッドという場所に住まう (属する) ことで、果たしてラスキン自身も “stability” を得ることができたのであろうか。

まず、ラスキンの “home” に関する議論について考察してみよう。ラスキン “home” は、主に女性論や女子教育論と関連付けられながら『胡麻と百合』 (*Sesame and Lilies*, 1865) のなかで論じられる。ラスキンは “home”

の本質について、次のように述べている。

It is the place of Peace; the shelter, not only from all injury, but from all terror, doubt and division. In so far as it is not this, it is not home: so far as the anxieties of the outer life penetrate into it, and the inconsistently-minded, unknown, unloved, or hostile society of the outer world is allowed, by either husband or wife, to cross the threshold, it ceases to be home. (18.122-123)

ラスキンは、“home”とは、全ての危害からだけではなく、全ての恐怖、疑念、そして分裂からの避難場所であると主張する。そして、そのような“home”には必ず“a true wife”が存在すると述べ、それらが密接に結びついている点を強調した。Birchは、ラスキンの言う避難場所としての“home”について次のように指摘する。

[t]he word ‘home’ was always a peculiarly weighted word for Ruskin, meaning something other than the kitchen, nursery, and parlour. . . . the true definition of home is closer to a spiritual condition than the four walls of a house. (121)

ラスキンの定義する“home”は、物質的なものではなく精神的なものに近い。精神に近接した“home”という意識がラスキンのなかに存在しているなら、当然“a true wife”も精神に近い存在として認識されていたと考えてよいだろう。

Each has what the other has not: each completes the other, and is completed by the other: they are in nothing alike, and the happiness and perfection of both depends on each asking and receiving from the other what the other only can give. (18.121)

男女が精神的にも補完し合うことを求めたラスキンは、女性が男性の精神的な助けとなり、互いが精神で繋がりあうことを望んだのである。

避難所としての“home”、つまり、外界から守られた“home”という理

想は、ラスキンの経験に基づいていると考えられる。ロンドンのハンター・ストリート (Hunter Street) 54 番地に生まれたラスキンは、5 歳になる前にハーン・ヒル (Herne Hill) 24 番地へと移った。その 19 年後、デンマーク・ヒル (Denmark Hill) 163 番地へと引っ越したが、子ども時代を過ごしたハーン・ヒルでの記憶に関する言及を辿ると、ラスキンの理想とする“home”の姿が見えてくる。次に引用する楽しい歓喜の詩は、ラスキンが子ども時代にハーン・ヒルを詠んだもので、庭の自然を楽しむ少年ラスキンの様子を鮮明に表現している。

Come to our hill, which always looks so pretty, —  
 The wooden palings in a rural row on  
 Each side, and over them you cannot think  
 How sweetly almonds smile, and blush the peach-trees pink. (2.456)

後に、ラスキンは、その子ども時代が孤独で、同年代の仲間との交流なしに隔離されたハーン・ヒルの庭で遊んでいたことを嘆いている。しかし、上で引用した詩が示しているように、ラスキンにとって、ハーン・ヒルが確かな幸福の場所であったことは、自伝のなかでハーン・ヒルを「楽園 (paradise)」(35.36) と呼んでいることから明らかだろう。厳格な福音主義者であった母親の監視の下、ラスキンは、外界との交流を絶たれ、全ての危険が遮断され守られたハーン・ヒルの庭で幼少時代を過ごした。常に母親の目の届く範囲に置かれ、大事に守られ育てられたわけである。その孤独な子ども時代を悲嘆しながらも、実際には、守られているという感覚を楽しんでいたのかもしれない。『建築の七燈』(*The Seven Lamps of Architecture*, 1849) における、子どもが「囲いのない平原に自由に放たれると怖がってしまうものである (would sit down and shudder if he were left free in a fenceless plain)」(8.259) という記述は、ラスキンが子ども時代にハーン・ヒルの庭で感じた心理的な安心感を反映しているに違いない。このように、あらゆる外界の危険から保護されたハーン・ヒルの庭で、守られていると

いう精神的な安心感の下で子ども時代を過ごしたラスキンが、その理想とする“home”を「避難場所」と認識するようになったのは必然であったように思われる。

ブラントウッドにおいてラスキンを精神的に支えたのはセヴァーン夫妻であり、特に、セヴァーン夫人（従妹のジョアン）に助けられるところが大きかった。<sup>7</sup> 夫人はラスキンに対して“maternal function” (Dickinson 15) を担いながら、“intimate domestic friendship” (Dickinson 19) を築き上げていった。ハーン・ヒルの庭で母親に守られながら子ども時代を過ごしたように、ブラントウッドの地においてラスキンは、ジョアンに見守られながら、その人生を全うしたのである。セヴァーン一家と共にブラントウッドの地に暮らすことで、そこにラスキンの理想とする“domestic comforts”を見出したのかもしれない。さらに Susan Beever やその妹 Mary をはじめとするコニストン村に住む人々との関わりを通じ、ブラントウッドだけではなくコニストンをも含む広範囲がラスキンの“home”となったと考えることができるだろう。そして、その土地の一員であるという“stability”を得たに違いない。

## おわりに

本稿は、ラスキンが湖水地方へと魅せられるまでを、ラスキンが子ども時代に家族旅行で訪れた湖水地方の記憶や、そこで詠んだ詩、さらにワーズワスからの影響に即して考察してきた。そして、主に自然を享受する場であった湖水地方が、後に癒しや回復を求める場となるまでを確認し、ブラントウッドを取り巻く人々との関わりの中かで、“home”を見出したと結論付けた。1877年、ケンダル (Kendal) の Friends' Meeting House にて行われた湖水地方の地質学に関する講演に際し、ラスキンは次のように述べた。

I knew mountains long before I knew pictures; and these mountains of yours, before any other mountains. From this town, of Kendal, I went

out, a child, to the first joyful excursion among the Cumberland Lakes, which formed my love of landscape and of painting; and now, being an old man, I find myself more and more glad to return. (26.243)

ラスキンは、湖水地方という土地へと戻ってきたことに確かな喜びを感じている。Sarap は、“We speak of *homecoming*. This is not the usual, everyday return; it is an arrival that is significant because it is after a long absence, or an arduous or heroic journey.” (90) と述べる。ケンダルでの講演で “to return” と述べたように、ラスキンにとって湖水地方とは、戻るべき “home” の場であったと言えるだろう。

注

1 ジョン・ラスキンの著作からの引用は全て E. T. Cook と Alexander Wedderburn 編 *The Works of John Ruskin* (library edition), 39 vols. London: George and Allen, 1903–1912. による。カッコ内のアラビア数字は全集の巻と頁をそれぞれ示している。

2 実際のところ、ラスキンは『近代画家論』(*Modern Painters*)の執筆中に、ワーズワスとの意見の相違に頭を悩ますことになるが、ラスキンにとってワーズワスは、『鋭い、洞察的な深部』を見抜くことのできた唯一の詩人であり、尊敬すべき偉大な詩人であり続けたと言える。(並河 34)

3 ワーズワスからの影響を論じた研究としては、Finly 著 *Nature's Covenant* (pp. 118–34) や Hewison 著 *John Ruskin: The Argument of the Eye* (pp. 16–19) に詳しい。

4 1830 年 *Spiritual Times* に掲載された。

5 後にラスキンは、クロード・グラスについて、“one of the most pestilent inventions” (15.201–2) と述べている。クロード・グラスが偽りの自然を映し出してしまうことに嫌悪感を抱くようになった。

6 コニストン・ホールは、プラントウッドの書斎から見ることができる (1.60)。

7 特にセヴァーン夫人(従妹のジョアン)がどれだけラスキンの支えとなったかについては、Dickinson 著 *John Ruskin's Correspondence with Joan Severn: Sense and Non-sense Letters*. London: Legenda, 2009. に詳しい。

参考文献

Bate, Jonathan. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*. London: Routledge, 1991.

Birch, Dinah. “What Teachers Do You Give Your Girls? Ruskin and Women’s Educa-

- tion” in *Ruskin and Gender*. Dinah Birch and Francis O’Gorman eds. London: Palgrave, 2002.
- Cate, George Allen. *The Correspondence of Thomas Carlyle and John Ruskin*. Stanford: Stanford University Press, 1982.
- Dearden, James. S. *Facets of Ruskin: Some Sesquicentennial Study*. London: Charles Skilton, 1970.
- Finley, C. Stephen. *Nature’s Covenant: Figures of Landscape in Ruskin*. Pennsylvania: Pennsylvania State University Press, 1992.
- Hewison, Robert. *John Ruskin: The Argument of the Eye*. London: Thames and Hudson, 1976.
- Hilton, Tim. *John Ruskin*. New Haven: Yale University Press, 2002.
- Ruskin, John. *The Works of John Ruskin* (library edition) . Eds. E. T. Cook and Alexander Wedderburn. 39 vols. London: George and Allen, 1903–1912.
- Sarap, Madan. “Home and Identity” in *Travellers’ Tales: Narratives of Home and Displacement*. Eds. George Robertson and Melinda Mash. London: Routledge, 1994.
- Seymour, Arthur. *The Professor*. Ed. James S. Dearden. London: George and Allen and Unwin. 1967.
- Wheeler, Michael. *The Lamp of Memory: Ruskin, Tradition, and Architecture*. Manchester: Manchester University Press, 1993.
- Wordsworth, William. *A Guide through the District of the Lakes in the North of England with a Description of the Scenery*. Kendal: Hudson and Nicholson, 1835.
- 並河亮『ワーズワスとラスキン』東京：原書房、1982.
- 山内久明「癒しと救いとしての詩作：ウィリアム・ワーズワス（1770–1850）の心の深淵」『了徳寺大学研究紀要 2』千葉：了徳寺大学、2008.
- 吉野昌昭『空間の思索：私的精神史への試み』東京：開文社、1994.